

オフィスの窓から

浅野ブエコ朝子



きらきら光るクリスマスツリーの代わりにこうこうとともるロースター、家族で囲むのは豪華な食卓ではなく、ぐるぐる回るチキンの丸焼き。クリスマスには家族の思い出がつきものだがわが家のそれは1年で1番の商戦、まさに戦場のメリークリスマスである。

チキンキッチンとお届け

き。見た目の豪華さはもちろん、ふつくらジューシーな絶品！ 外国のクリスマスさながらの姿は徐々にパーティーの定番になり、浦添の小さなお店はクリスマスだけ大行列ができるように。1日500羽をさばっていた父母。それは話を聞いただけでギブアップしたくなるすさまじさ。

朝4時から夜9時までチキンを焼き続け、その後に残る大量の洗い物と翌日の仕込み。帰路に着くのは日

り、とんでもなく忙しい中で流し台が壊れて慌てふためいたり「チキンの予約ができなかった」と怒鳴り込んでくるお客さまに平謝りしたり、普通とは一味も二味も違うわが家なりのクリスマスへの思いが増えていった。10年前は「クリスマスはクルシミマスだわ！」と嘆いていた母も今は「みんなが頑張ってくれて楽しんだわ」と話す様子を見ると娘として親孝行も果たせた気がしてうれしい。

をまたぐ時間で、それが数日続くのだから心底恐ろしい。母は店に入ると吐いてしまい出勤できないこともあったという。幼い私は祖母の家に預けられパーティーなんて無縁、クリスマスは少し寂しいものとして心に刻まれていたが、それも後継ぎとなって変わった。

そうして親子の時間を職場で紡ぎながら後継ぎの10年がたちいつの間にか私も2人の子どもを持つ母に。お店のクリスマスも夜6時には閉店、家族でささやかなだんらんを持てる営業形態に変わっている。スタッフと父母に感謝しながら、今年のクリスマスもチキンと、いやキッチンと、楽しいチ

朝4時に父とともに出勤し、暗い夜明け前の空を眺めながらコーヒーを飲んだ

キンを届けたい。(世界のブエノチキン合同会社代表)

今回は新垣貴雪氏(中部興産社長)です。